

研究ノート

ジェネラリスト・ソーシャルワークに基づく 精神科ソーシャルワーク実践に関する考察 —— エピソード記述法を用いた事例分析の可能性 ——

羽 鳥 恵 一・松 田 美 枝

1. 背景と目的

近年、ソーシャルワーク実践の主流がジェネラリスト・ソーシャルワークとなりつつある中、ソーシャルワーカー（以下、SW_r）には、ミクロ・メゾ・マクロにわたる広範な視野を持った実践を行うことが求められるようになってきている。そこでは、エンパワメントの理念やクライアントのストレングスを重視しつつ、本人と環境との相互作用に重点を置き、クライアントのニーズに基づいた意思決定支援が重視される。ジョンソン（Louise C. Johnson）らは、このようなSW_rの創造的姿勢を「ソーシャルワークのアート」とし、「知識と価値と技術の活用の中に科学とアートが融合されて、専門職業的なソーシャルワークの本質が発揮される」（Johnson & Yanca=2004：78）と述べている。精神科ソーシャルワーク実践においても、例えば精神科病院に入院となる患者や外来相談で持ち込まれるニーズが多様化するなど、精神科ソーシャルワーカー（以下、MHSW：Mental Health Social Worker）¹⁾にはその都度での対応力が求められるようになってきている。しかし、このような「ソーシャルワークのアート」は、従来SW_r個人の内に秘められ、ブラックボックス化してきたものである。まさに、安井理夫が「属人的な勘や経験、熟練した技などに依拠しなければ、ソーシャルワークは専門的な支援

として成立しえない」（安井 2009：33）と指摘する事態が、そこに生じているのである。

このような中、SW_rにはショーン（Donald A. Schön）が「行為の中の省察」（Schön = 2001）と述べるような省察的実践が求められることになる。これは、SW_rが自身の実践を常に振り返りつつ、省察しながら実践を行う姿勢である。しかし、このような省察はSW_r個人の痛みを自覚し、外在化することにも繋がるため、それぞれのSW_r自身の内に秘匿されるような性質のものである。結果として、個人の省察の実際はほとんど語られてこなかったのではないかと考える。

しかし、ジェネラリスト・ソーシャルワークに基づくソーシャルワーク実践の場合、「ソーシャルワークのアート」やSW_rの省察的実践の実際を、何らかの形で可視化する必要があるのではないだろうか。特に、ニーズが多様化する精神科病院におけるMHSWにとっては、的確なクライアントのニーズのアセスメントが求められるため、より「ソーシャルワークのアート」に対する意識が重要になる。そのためにも、自身の実践を常に省察する姿勢が求められることになるであろう。なお、精神科ソーシャルワーク実践に関する先行研究では、横山登志子（横山 2008）や大谷京子（大谷 2012）がオールラウンドに実践することのできるエキスパートのMHSWに至る成長過程やそこでの葛藤状況の

分析、さらにはエキスパートに求められる視点や資質、援助観などを検討している。しかしその一方で、精神科ソーシャルワーク実践の実際を踏まえたMHSWの思考過程や省察の実際については明らかにされていない。

このような観点から、本研究では実際に筆者が関わった事例を検討してみたい。具体的には、鯨岡峻が提唱する「エピソード記述法」を用いて事例を分析することにより、筆者自身の思考過程や省察の実際について明らかにする。その上で、ジェネラリスト・ソーシャルワークに基づく精神科ソーシャルワーク実践において、「エピソード記述法」の持つ有効性について考察してみようと思う。

2. 先行研究の検討

ここでは、上記のような問題意識を踏まえ、ジェネラリスト・ソーシャルワークに関する先行研究を概観した上で、実践にあたるSWrの実践知や思考過程にかかる先行研究を検討する。

2-1. ジェネラリスト・ソーシャルワーク

ソーシャルワークは、リッチモンド (Mary E. Richmond) によって科学化・体系化が目指されて以来、分野ごとに専門特化して発展を遂げてきた。それが1970年代以降、ソーシャルワークの共通基盤を見出すことにより、統合化が目指されるようになる。例えばバートレット (Harriett M. Bartlett) は、ソーシャルワークの価値と知識を共通基盤に据えてソーシャルワーク実践を捉え、人と社会との相互作用や社会的状況の個別性を重視することで、実践方法が決まると考えた (Bartlett = 1978)。具体的には、ソーシャルワーク実践における主要な概念として、「人びとの対処 (people coping)」と

「環境からの要求 (environmental demands)」の二つを挙げ、これを完成するのは「社会的相互作用 (social interaction) の概念」であるとして、ソーシャルワークを包括的に捉えようとした (Bartlett = 1978:103)。バートレットはまた、クライアントの置かれた状況を理解する手法として、従来、診断や治療、スタディなどとして専門分野ごとに用いられてきた技術を、「専門的判断 (professional judgment)」を前提とした「事前評価 (assessment)」として統合した。ここにおいて、SWrの「専門的判断」によって様々な「調整活動のレパートリー」を駆使して実践活動に当たるとして、ソーシャルワークの統合が試みられることとなった。

このような人と社会との相互作用を重視する視点をさらに展開したのが、ジャーメイン (Carel B. Germain) らが提唱するエコロジカル・システムモデルである (Germain & Gitterman 2008)。ジャーメインらは、「環境の中の人間 (person-in-environment)」 (Germain & Gitterman = 2008:4) という概念を用い、生態学を用いてソーシャルワーク実践の統合を試みている。ジャーメインらによれば、SWrは「その専門的な任務として、人間と環境の両方へ同時に関心を持ち続ける」 (Germain & Gitterman = 2008:18) のであり、それによってクライアントの環境への適応を働きかけることになることとされる。ここでは、様々なクライアントの環境への適応事例も提示され、SWrのアセスメントの実際やクライアントとの具体的な面談技法、社会的ネットワークの形成のあり方、政策レベルへの提言などが提示されている。ここにおいて、人間と環境との交互作用という概念に基づき、ソーシャルワーク実践はミクロ・メゾ・マクロが連続した、包括的な実践へと導かれることとなった。

このようなソーシャルワークにおける実践理

論の展開を背景に、ジェネラリスト・ソーシャルワークが登場してくることになる。その当初こそは、複数の用語が用いられていたが、現在では、ジョンソンらによるジェネラリスト・ソーシャルワークに統一されるようになってきている。ジョンソンらによれば、ジェネラリスト・ソーシャルワークとは、エコシステムとストレスの視点を前提に、社会や環境との相互作用に焦点を置くものとされる。その際、クライアントの置かれた困難な状況を共感的に理解し、その状況について考察を行い、何らかの活動を展開することになる。そこでは、困難に直面しているクライアントのアセスメントが重要になるが、そのような場面においてSW_rには、知識、価値、技術を創造的に混合する能力が求められることになる。ジョンソンらは、このような創造性を「ソーシャルワークのアート」と位置づける。その上で、ソーシャルワーク実践における、クライアントとの関係性や成長と変化を志向する実践のプロセス、環境との相互作用、そこでのインターフェイスに着目する視点、家族やグループなどといったマルチパーソンシステムにおける相互作用を活用する姿勢、問題解決過程に則り、直接援助と間接援助を効果的に活用する視点など、マイクロ実践からメゾ・マクロを統合する実践の実際を提示している。なお、そのような実践の前提となるのがクライアントのニーズであり、それを踏まえた上で、クライアントと環境との相互作用に変化を生じ、課題達成を目指すプロセスがソーシャルワーク実践として位置づけられるのである。ジョンソンらは、このようなプロセスを具体的な事例を交えて説明している。

ところで、日本におけるジェネラリスト・ソーシャルワークも、当初は複数の用語が用いられていた。例えば太田義弘と秋山薊二は、副題に「社会福祉援助技術論」と冠してジェネラリスト・ソ

シャルワークを提唱し、実際の事例を提示して、SW_rの機能や役割を詳細に分析している（太田・秋山 1999）。ここにおいても秋山が、ソーシャルワーク実践を「アート」と捉え、「人間の持つ性格や特徴がアートの因子となり、特有の専門職的対人関係や専門職のスタイルを造りだし、これがワーカーの独特の援助技術の風合いや援助活動の色彩を生み出すところから、アートといえるのである」（太田・秋山 1999：141）と述べている。なお当初の複数の用語は、現在ではジェネラリスト・ソーシャルワークに統一されて定着するようになってきているが、いずれにしても「ソーシャルワークのアート」と言えるような、SW_rの創造性や想像力、勘や経験といった実践知など、従来属人的とみなされてきたものが重要視される。ちなみに、ジェネラリスト・ソーシャルワークに基づく事例を踏まえた実践報告については、上記以外にも中村剛（2010）や山辺朗子（山辺 2011；山辺 2015）などを挙げることができる。しかしいずれにおいても、各事例をジェネラリスト・ソーシャルワークの視点に合わせて分析しているに留まっており、SW_rの勘や経験として個人の内に秘められた思考過程や実践知、省察の実際については言語化されていない。筆者は、このような実践におけるSW_r、特にMHSWの思考過程や省察について言語化する必要があるのではないかと考える。このような観点から、続けてSW_rの実践知や思考過程に関する先行研究について概観してみたい。

2-2. ソーシャルワーカーの実践知

上述のように、ジェネラリスト・ソーシャルワークが主流となる中、近年、「ソーシャルワークのアート」への関心が高まっている。しかし、CiNii Researchを用いて検索すると、「ソーシャルワーカー」「実践知」については10件の論文、

「ソーシャルワーカー」「思考過程」については4件の論文が該当するに留まっており(2022年10月1日現在)、それほど多くはないのが現状である。

その中でも、例えば平塚良子は、SWrの実践知を可視化すべく研究を行っている。平塚は、「ソーシャルワークが人の知恵、わざによる限り、半分はアートが占めるといっても過言ではない」(平塚2010:52)とし、「ソーシャルワーカーは実践対象に出会うことで、その身において触発された諸感覚と学習や経験を通して獲得した多様な知の集積である『溜め込まれた思考』(pooled thinking [実践知:アートの知])が呼び覚まされる」(平塚2022:ii)のであり、そのようなSWrのアート性を掘り起こすことがソーシャルワーク実践の可視化に繋がる、と考える。その上で、SWrの実践知を「見える化」すべく、「7次元統合体モデル」を用いて分析を加えている(平塚2022)。具体的には、SWrにインタビューを行い、その実践データを「7次元統合体モデル」に当てはめて分析し、実践知の図式化を試みている。しかし、ここで目指されているのはあくまで実践知の可視化であり、SWrの思考過程や省察的実践の実際については触れられていない。

次いで、精神科ソーシャルワーク実践におけるSWrの思考過程を見ると、田村綾子らが実際の事例に即して、MHSWの思考過程を記述している(田村2017)。ここでは、事例の様々な場面に合わせて、MHSWがどのように考え、どのように発言し、具体的な実践を行っているかが可視化されている。しかし、ここではあくまでMHSWが事例においていかに思考しているかを言語化しているに留まっており、MHSW自身の実践の振り返り、すなわち省察的実践の過程は描き出されていない。その一方、日和恭世はSWrの省察的実践について、「エピソード記述法」を用いてその思考過程の言語化を行うとともに、省察的実践の可視化を試みている(日和2019)。ここでは、1名のSWrに対するインタビューをもとに、「エピソード記述法」を用いて分析することで、実践に当たるSWrの思考過程を明らかにするとともに、実践を振り返った言語化を行っている。ただし、これはあくまでインタビュー調査に対する「エピソード記述法」を用いた分析であり、実際の事例に対する分析ではなく、実践に即した言語化が試みられているとは言えない。

このように、SWrの実践知や思考過程を言語化し、可視化する先行研究では、ソーシャルワーク実践、特にMHSWの思考過程や省察的実践を、事例に基づいて同時に明らかにしているものは見られない。しかし、「ソーシャルワークのアート」、いわば属人的なSWrの勘や経験といった実践知を可視化するためには、実際の事例に即してMHSWの思考過程とともに省察的実践の実際を明らかにする必要があるのではないかと考える。

3. 研究の方法

ここでは、本研究の方法としての「エピソード記述法」について概観し、本研究の方法及び倫理的配慮について述べる。

3-1. エピソード記述法について

対人援助の現場では、様々なクライアントとの関わりの中で、援助者の気持ちが強く揺さぶられたり、深い気づきをもたらされたりする場面がある。そのような体験を紙面にまとめ、その実像を描き出し、よりよい実践へと繋げるための記述法として、「エピソード記述法」を挙げることができる(鯨岡2005;鯨岡2012)。鯨岡によれば、「エピソード記述法」で記述され

るエピソードとは、「『いま、ここ』において当事者に『感じられる』さまざまな事柄、つまり、相手との関わりの中で得られる情動が揺さぶられる経験や目から鱗が落ちるような深い気づき」（鯨岡 2005：22）であるとされる。このような「深い気づき」を記述することは、日常生活の背景となって意識されていない「当たり前」を明らかにすることに役立つ。すなわち、「『当たり前であること』の意義や重要性は、その『当たり前』が壊れたり、崩れたりしたときに、目に見えるものに」（鯨岡 2005：221）なるのであり、画一的にしか捉えられないような「意味づけを一つの意味づけと相対化し、それ以外に他の読み方はないのか」と問い続けること、これがエピソード記述の方法論にとって大事な視点」（鯨岡 2005：201）なのである。

上述のように、本研究では MHSW の実践知や思考過程、さらには省察の実践の言語化に焦点を置いている。これらを明らかにするために、本研究では「エピソード記述法」を分析方法として用いてみたい。また、ここで提示する事例は、筆者自身が実際の実践で関わったもので、まさに実践の最中に感情が揺さぶられ、実践途中から本論執筆までの間に、様々な思考がもたらされたエピソードである。このようなエピソードを分析することで、それが生じた文脈や状況、筆者自身の思考過程、さらには省察の実際について検討を行うことができると考える。なお、社会福祉分野において「エピソード記述法」を用いた研究として森口弘美（2010；2015）を挙げることができるが、これらはあくまで知的障害者支援における事例を分析しており、精神科領域において「エピソード記述法」を用いた分析は見当たらない。しかし筆者は、精神科領域においてこそ、例えば精神科病院の閉鎖環境や非自発的入院を自明と認識してしまうように、鯨岡が言うような「当たり前」が無

意識に背景化してしまう傾向があるのではないかと考える。そのため、「エピソード記述法」を用いることで、このような「当たり前」を明らかにすることができるのではないかとの仮説のもと、ここでは精神科ソーシャルワーク実践を、「エピソード記述法」によって分析していくものとする。

なお「エピソード記述法」は、あくまで一事例のエピソードに対する分析であり、一般化が難しいものでもある。しかし鯨岡は、「エピソード記述が目指す一般性は、手続きではなく、むしろ読み手の読後の了解可能性、つまりどれだけ多くの読み手が描き出された場面に自らを置き、『なるほどこれは理解できる』と納得するか、その一般性を問題にする」（鯨岡 2005：41）と述べている。このことから、「エピソード記述法」では、エピソードをなるべく多くの読み手に読んでもらい、それに対して了解可能性を確認する必要がある。したがって本研究では、以下に提示するエピソードを 11 名が参加する研究会で発表し、それぞれの了解可能性を確認した。その際、記述が曖昧もしくは論理的な飛躍があるなど、分かりづらさが指摘された部分についてはリライトを行った。その上で、共同執筆者と協議を行う形を取った。

このように、研究会や共同執筆者との協議では、読み手の了解可能性を吟味することに一つの主眼を置いたが、その一方で「エピソード記述法」ではそのエピソードが持つメタ意味を描き出すことも重視されている。メタ意味とは、「その出来事の表面の意味を超えた意味、あるいはその奥の意味」（鯨岡 2005：23）である。したがって、事例を検討する際には、エピソードに含まれる「メタ意味」に対する分析を加えた記述を提示し、「メタ意味」の了解可能性についても確認を行った。また、鯨岡は、あるがままの事実として描き出されたエピソードが、

「読む人に何らかの感動を与え、読む人の生に何らかの影響を及ぼす限りにおいて、そのエピソードは単なる出来事を越えた意義深い意味、つまり、日常性を切り裂く中身を含む」（鯨岡2005：29）と述べていることから、提示したエピソードが読み手に与える影響についても、併せて吟味した。

なお本事例は、エピソードの発生及び事例の終結から論文執筆までに10年以上の期間を経ているものであるが、筆者の感情を揺り動かした実践の一つでもあることから、メモ書きとして残していた経緯があった。今回のエピソードの記載に当たっては、そのメモ書きと筆者の記憶からエピソードを想起したが、相当な期間が経過していることもあり、客観的事実の正確性には限界があるものと思われる。しかし、本研究では「エピソード記述法」を用いていることもあり、エピソードの細部にこだわるよりも、エピソードそのものの持つ本質から、筆者がどのように分析したか、またそれを読む読み手にどのように影響を及ぼしたかを検討することを優先した。

3-2. 倫理的配慮

本事例の提示に関する研究倫理としては、日本社会福祉学会の倫理規程を遵守し、B病院内の倫理委員会の承認（2019年11月27日承認：第20191127-1号）を得た。しかし、A氏はすでに他界されており、しかも本事例終結からすでに10年以上が経過し、家族とも連絡が取れない状況となっていることから、本人及び代理人への説明及び同意を得ることができなかった。そのため、あくまで事例全体ではなく、「エピソード記述法」による一つのエピソード場面を記述していることを前提に、個人が特定される情報を省略すること、さらには家族の個人情報にかかる記載がないことといった配慮を行っ

て執筆した。

4. 研究結果

上記の研究方法を踏まえ、ここでは「エピソード記述法」を用いた事例を提示し、第一次考察としての「メタ意味」の分析を行った。また、エピソードが読み手に対してどのような影響をもたらしたかについても検討を加えた。

4-1. 事例を通して考える

【事例】A氏：70代女性、統合失調症

〈背景〉

A氏は、若い頃に統合失調症を発症し、精神科病院に入退院を繰り返していた。筆者がA氏と出会った時には、その時点での入院期間がすでに15年にも及んでいた。急性状態はすでに脱しており、慢性期療養病棟に入院していた。その病棟は開放病棟で、A氏もナースステーションに声を掛けさえすれば、自由に外出することのできる状態であった。しかしA氏は、毎日自室のベッドで横になるか、廊下をウロウロとされる程度で、全く外出することはなかった。時折、筆者が散歩や外出を促すも、毎回何かしら理由を付け、断ることが続いていた。

当時の筆者は、精神障害者通所授産施設並びに小規模作業所において10年ほどMHSWとしての実践を重ね、クライアントとSWrとの対等性への限界、専門職としての自身の持つ権威性に悩み、葛藤していた。そのため、筆者は一旦MHSWとしての立場を離れ、職種を変えることで、改めてMHSWの支援のあり方、自身の関わり方を振り返るべく、精神科病院で看護補助者として勤務を始めた。筆者が勤務した療養病棟は退院促進プログラムを積極的に実施しており、筆者もあくまで看護補助者の立場であったが、それまでの経験を買われ、退院促進

プログラムの策定チームに加わることとなった。なお、病院の相談室には病棟専従のMHSWもいたが、あくまで退院支援の専従MHSWとして配置されており、病棟プログラムは病棟看護師・看護補助者で実施するものとなっていたことから、退院促進プログラムには参加していなかった。そのため、筆者はそれまでのMHSWの経験を活かし、退院阻害要因チェックリストを導入して、入院患者それぞれに対する阻害要因の調査を行った。また、ケアマネジメントにおける個別支援計画表を援用し、入院患者それぞれの直近及び将来の希望を聞き取るシートを作成し、全患者に担当看護師とともに個別面談も実施した。病棟スタッフには、患者の「退院したい」という声を引き出す思惑もあったが、期待に反して、患者からは「買いたい物がしたい」「外食がしたい」など、生活面に対する具体的な希望が多く聞かれることとなった。

〈エピソード〉

A氏に対しても、担当看護師と共に希望の聞き取りを行った。するとA氏は、短期及び長期の希望のいずれに対しても、「たまごかけごはんが食べたい」と語った。それを聞いた直後は、その理由がしっかりと理解できなかった。しかも短期と長期の希望が同じであったため、筆者は不思議に思い、「え？たまごかけごはん？」と聞き返した。それに対してA氏は、「食べたいねん」とだけ答えたため、それ以上の質問は控えることにした。面談直後、このやり取りについて担当看護師と話し合ったところ、病院では食中毒のリスクから生食が食べられず、結果として、A氏は長年にわたって「たまごかけごはん」を食べることができなかったことに気がついた。そのため、何とかしてA氏に「たまごかけごはん」を食べてもらいたいと考え、担当看護師と共に病棟師長に事情を説明した。

しかし案の定、病院では生食は食べられない、との回答で、許可を得ることはできなかった。それでもA氏の希望を実現すべく、取り組みの中でA氏の活動量が増加し、退院に繋がる可能性もあるなどと理由を加え、担当看護師とともに何度も病棟師長に説得を試みた。するとようやく、病棟師長が給食課に掛け合ってくれることとなった。しかし、そこでもやはり許可を得ることはできなかった。それでも諦めずに病棟師長にお願いをしたところ、師長から改めて給食課に打診してもらうこととなった。その結果、しぶしぶ「火を通せば可」という結論を得るに至った。

給食課の結論を踏まえ、担当看護師と共にA氏に説明をしたところ、A氏はとても嬉しそうに「火を通して構わないが、たまごかけごはんがいい」と話し、「いつ食べられますか」と質問してきた。そのため、担当看護師と筆者が日勤で重なる日時を選び、A氏に提示した。A氏は笑顔で「よろしくお願いします」と答えた。

以降、筆者は担当看護師と実施に向けた計画を検討した。具体的には、①当日の午前中、看護師と筆者と共に生たまごを買いに出かけることをA氏に提案し、もしA氏が断れば、看護師か筆者のいずれかが購入してくる、②費用は3者で折半する、③看護師と筆者も当日の昼食は給食とし、食堂から病棟に持ってきておく、④醤油は行事用で病棟に置いてあったものを使用する、⑤場所は面談室を用い、他の患者から見えないようにする、⑥「たまごかけごはん」を作った後、電子レンジで若干温め、火を通したことにする、といったものであった。事前に病棟師長にもこの計画案を提案したところ、レンジでの温めには難色を示されたが、それでもしぶしぶ了承を得ることができた。

実行の前日、筆者は翌日の予定を確認すべくA氏を探したが、病棟にA氏の姿が見えなかつ

た。しばらくして、A氏が病棟に戻ってきた。珍しい外出だったため、筆者が声を掛けると、病院近くのスーパーで「生たまごを買ってきた」とのこと。A氏は6個入りの生たまごのパックを一つ、購入して帰ってきたのであった。筆者は、ほとんど外出することのなかったA氏が、一人で外出したことに嬉しさと同時に感動を覚えた。その上で、なぜ6個入りなのかと聞くと、A氏は、本人と担当看護師と筆者の分として、それぞれ2個ずつ、と答えた。筆者は感謝の念を感じると共に、我々のために一人で動いてくれたA氏に対して感激した。筆者は、費用を折半させてほしいとA氏に申し出たところ、A氏は看護師と筆者にお礼がしたいとして、頑として受け取らなかった。この時、筆者は、病院職員として患者から物を受け取っても良いものか、自身の立場が危ぶまれるのではないかと不安がよぎった。それでも筆者は、A氏の好意に与りたい気持ちの方が強かったため、病棟師長に相談をした。結果、今回はA氏が機嫌を損ねて計画倒れになるよりも、A氏の思いを汲もうということになった。その代わりに、筆者はたまたま自宅にあった「たまごかけごはん」専用の醤油を持参することにし、A氏に伝えた。これについては、A氏もすぐに了承してくれた。

当日、計画通りに3名で「たまごかけごはん」を食べた。A氏は「久しぶりに食べる」「自宅にいたときはよく食べた」「たまごかけごはんが大好きだった」「やっぱりおいしい」などと、嬉しそうに笑顔で語った。

「たまごかけごはん」を食べてから、A氏は担当看護師と筆者に、その時のことをたびたび話すようになった。病状が悪い時には、「レンジでチンされたので、あれはたまごかけごはんではない」などと話すこともあったが、多くは嬉しそうに語っていた。しかし、A氏はその後も相変わらず病棟の外に出ることはなく、自室

にとどまるが多かった。そのため、看護師と共に再び「たまごかけごはん」を食べる企画を立てようかと話し始めた。そのような折、A氏に癌が発見された。たまたま実施した血液検査で異常が見つかり、詳細な検査をしたところ、すでに末期の癌であることが判明したのであった。

それ以降、A氏は日に日に体調を崩し、ベッドで横になることが増えていった。それでもA氏は、筆者に「たまごかけごはんがまた食べたい」と語った。しかし、A氏は徐々に食事でもできなくなり、体重も減少し、いつしか常時点滴をしなければならないような状態となった。そのため、A氏は身体合併症を治療する病棟に転棟することとなった。転棟から1か月を待たず、A氏は他界された。

A氏が亡くなったと聞いた担当看護師と筆者は、すぐさまA氏に会いに行った。安らかな寝顔であった。その際、担当看護師と筆者で、「たまごかけごはん」を一緒に食べた時の思い出を語った。そして、それがA氏にとって最後の「たまごかけごはん」になったと、共に涙した。

〈メタ意味の分析〉

今回取り上げたエピソードは、筆者自身の情動が揺さぶられたと同時に、様々なことを考えさせられたものである。その一つが、精神科病院の「当たり前」についてである。筆者は、入院患者それぞれから、実際の退院に対する不安を少なからず聞いたことがあったため、各々の希望を聞き取る中で、積極的に「退院したい」という直接の希望は出てこないであろうと予想していた。それと同時に、入院生活でなかなか実行が難しいが、ともすればできそうな内容が提起されるのではないかと考えていた。しかし、今回の「たまごかけごはん」は、筆者にとってはあまりに「当たり前」すぎて、聞いた直後、すぐには理解できなかった。そのため、筆者は

看護師とのやり取りの中で上述のように理解した時、精神科病院に入院を余儀なくされるということは、このような当たり前の日常性が断絶していくことなのだ、改めて痛感させられた。

それと同時に、入院による「非日常」が「日常化」する中で、当たり前の日常性とかけ離れることにより、そのような生活への諦めと同時に退院に対する不安感が高まっていくのではないかと、とも考えた。確かに、A氏にとって「たまごかけごはん」がどのような意味を持っていたのかは分からないが、入院中の「日常性」とかけ離れたものであったことは事実であろう。それを病院内で、しかも担当看護師と筆者とともに食べることがきっかけとなってA氏が一人で買い物に出かけたように、入院に伴う「日常化」した「非日常」にひとたび亀裂が入ると、おのずから日常性に戻ろうとする機序が働くのではないだろうか。このエピソードから、このように考察することができた。

また、A氏は担当看護師と筆者に対して生たまごを購入してきてくれた。筆者は代金の折半を申し出たが、A氏は頑として受け取らなかった。その結果、A氏の好意に与る形となったが、このことは病院職員としての職務規律や職業倫理、対人援助を行うものとしての倫理規程や行動規範に反する可能性がある。筆者はその代わりに専用の醤油を用意することにしたが、これはその代替となることではない。しかしこのエピソードで、たとえ自身の病院職員としての立場、ひいては専門職としての立場が危ぶまれる可能性があったとしても、「たまごかけごはん」を3人で食べたこと、そのときの思い出が、A氏や我々の人生にもたらした意味を考えたとき、A氏の好意を受け容れることは決して無駄なことではなかったのではないかと考えるのである。

確かに、このエピソードは、ただ1回だけ、

A氏と「たまごかけごはん」を食べたに過ぎず、その後何の結果も見いだせなかったのも事実である。しかも、上述のような危険性を孕む実践でもあり、そこまでしてまで行う必要があったのか、と、問われても仕方がないかもしれない。しかし、A氏が自らの意思で外出をして生たまごを購入してきたこと、しかも我々の分も併せて購入してきたことから考えても、A氏にとって病院内で「たまごかけごはん」を食べること、それも我々と食べることに意味があったのではないかと推察される。このことは、MHSWの支援のあり方に対しても大きな問いを投げかけているのではないだろうか。すなわち、ソーシャルワーク実践とは、このような職場の規律や専門職の規範と葛藤状態にありながらも、それを超えた「人」と「人」との関わりでの「あいだ」で行われるものなのではないか、との問いである。MHSWの支援とは、専門職による一方的な「支援」ではなく、A氏が我々のために生たまごを買ってきてくれたように、相互の「分かち合い」の中で営まれていくものなのではないか。いやむしろ、A氏の心遣いに対する感謝として返されるべきものなのかもしれない。だからこそ、MHSWは自身の損得勘定を抜きに、クライアントの希望やニーズを叶えるべく実践するのであろう。ソーシャルワーク実践がクライアントとの相互関係の中で営まれるとは、まさにこのような事態を指しているのではないかと考えるのである。ちなみに今回の実践は、看護補助者としての筆者が行った実践である。しかし、MHSWの立場を離れ、その支援の実際を客観視することができたからこそ、このようなMHSWの支援の本質に気づくことができたのである。それと同時に、この事例を通して筆者は、改めて自身がクライアントの生活を重視し、ニーズを優先するなどといったMHSWとしての価値や理念、アイデンティ

ティを有していることを実感させられることとなった。MHSWの支援とは、このようなソーシャルワーカーとしてのアイデンティティを有した者の実践と言えるのではないだろうか。クライアントとの対等性やMHSWの権威性に葛藤していた当時の筆者にとって、このエピソードはA氏との最後の思い出として、忘れられない実践の一つとなっている。

なお、このエピソードからは、精神科病院の中での「日常化」した「非日常」に抗うことの難しさも理解できるであろう。今回、「たまごかけごはん」を病棟で食べるまでの間に、いくつかの障壁があった。特に大きかったのは、生食は不可、という課題であった。今回は、担当看護師や病棟師長に理解があったため実行に移すことができたが、場合によっては困難だったのではないかと考える。確かに精神科病院には、多くの制度上、組織上の限界がある。それを乗り越えるためには支援者にあきらめない姿勢が求められるが、このエピソードからは、本人の希望を大切にしようという思いを共有するチームの存在が欠かせないことが理解できる。言い換えれば、たとえ職種を超えたとしても、「A氏のために」という思いは共有可能であることを示しているとも言える。多職種チームとは、このような本人の希望を大切にすることを共有するところから始まる、と考えられるのではないだろうか。

4-2. 事例がもたらす影響性の吟味

上述のように、本研究では提示したエピソードの了解可能性について、研究会と共同執筆者との間で協議を行った。その際、エピソードを通じて感じられた主観的な感情の動きや気づきについても吟味した。

研究会では、様々な背景を持つ研究者11名が参加した。具体的な内訳は、筆者の他、福祉

系大学教授2名、福祉系大学助教1名、福祉系専門学校教員1名、福祉系大学院生（福祉現場実践者）1名、福祉系大学院生5名となっている。そのうちの福祉系大学助教はMHSWとしての経験を有する研究者で、A氏が短期及び長期の希望のいずれに対しても、「たまごかけごはんが食べたい」と語ったことに対して、それぞれの質感が異なるのではないかと感想を述べた。具体的には、短期的な希望は、あくまで病院で看護師と筆者と食べるということで、長期的な希望は、将来的に「たまごかけごはん」が食べられる環境に身を置きたい、ということではなかったのかと、自身の経験を交えて語った。また、別の大学院生の参加者は、知的障害のきょうだいを持つ研究者で、エピソードを読んで施設に入所しているきょうだいのことを想起したと感想を述べた。何が食べたいかを聞かれても答えられないそのきょうだいは、施設に入所しているために食べたいものも食べられず、ただ与えられたものを食べる生活に置かれている。買い物にも出られない状況で、本当にやりたいことは何なのか、環境は違うが、A氏と同じような境遇にあることに思いを馳せた、と語った。

また、共同執筆者との協議の中では、共同執筆者が関わった2人のクライアントを思い起こした、との語りがなされた。具体的には、他者に対して、何かと他罰的な態度をとる一方で、それでも孤独になって周囲に誰もいなくなってしまったときには、贈り物で他者と繋がろうとするクライアントと、自殺未遂を繰り返していたが、恋人ができたり、仕事の可能性が見いだされたりと、現実の生活が充実してきた矢先に既遂して亡くなったクライアントとのエピソードであった。前者では、他者と繋がる「もの」の意味、後者では、人生をやり遂げた後の人生の意味を考えた、との感想が聞かれた。このことから、提示したエピソードが共同執筆者に対

して、今まで関わってきたクライアントを想起させるきっかけとなったことが理解できる。また共同執筆者からは、今回の事例においてA氏が亡くなったとき、自然と涙を流した筆者らに対して、A氏にとってそのように涙を流す他者がいたことが重要ではないか、そこに意味があったのではないかと、との感想も聞かれた。A氏と共に、病棟で無理を押して「たまごかけごはん」を食べたことで、そのように自然と涙が出る関係になったと考えられるが、そのエピソードがなければ、もしかしたらA氏にとってそのように涙する他者には出会えなかったのかもしれない。であるとすれば、ソーシャルワーク実践において、「人」と「人」として深いところで繋がることの意味を改めて考える必要があるのではないかと。共同執筆者からは、このような示唆に富んだ意見を聞くことができた。

以上のように、研究会及び共同執筆者との協議の中で、今回提示したエピソードが様々な影響をもたらしたものであったことを確認することができた。

5. 考察及び課題

以上の結果を踏まえ、ここではジェネラリスト・ソーシャルワークに基づく精神科ソーシャルワーク実践におけるMHSWの思考過程や省察的実践の分析における「エピソード記述法」の有効性について考察してみようと思う。またその上で、本研究の限界や今後の課題についても検討を加えてみたい。

5-1. 考察

今回提示した事例は、様々な働きかけによりA氏の希望を実現したエピソードである。そこには、精神科病院に入院を余儀なくされるA氏を取り巻く環境、多くの希望が制限される状

況があった。そのような現状に対して、何らかの変化をもたらすべく、ケアマネジメント手法を援用したニーズ調査を行い、A氏から「たまごかけごはんが食べたい」といった短期・長期の希望を聞き出すことができた。このA氏の希望を軸に、病院との交渉を行ったが、ここにはアドボカシーの機能や調整の役割を見出すことができる。また、その都度A氏とも面談を行い、希望の実現に向けて調整していることを伝え、本人を支持することで、計らずも、A氏が個人で生たまごを購入するという行動を導くことに繋がった。このように見ると、そこにはエンパワメントの機能が含まれていたと考えることができる。さらに、A氏の希望を実現すべく、最終的には看護師長も協力するなど、本人を支えるチームの形成にも繋がった。このことは、メゾレベルでの実践とも捉えられるであろう。結果として、A氏との関係は、A氏の死去によって終結を迎えることになるが、その時に自然と涙した看護師と筆者にA氏との関係の深まりを見ることもできるのではないだろうか。このように、改めて事例を分析してみると、少なからずジェネラリスト・ソーシャルワークの視点が織り込まれた実践であったと考えることができるのである。

また今回の分析では、「エピソード記述法」を用いたが、事例を分析するだけでなく、そこにあるメタ意味の分析を加えることで、A氏と関わった筆者自身の思考過程を言語化することができた。このことから「エピソード記述法」は、MHSWの実践を振り返り、そこでの思考過程を言語化するとともに、自身の実践の省察にとっても効果的な方法であると考えられる。さらに「エピソード記述法」は、それを読む読者にも影響をもたらす。実際に本研究でも、研究会及び共同執筆者との協議の中で、様々なエピソードを想起させ、また感情のゆらぎをも

たらずことになった。これは言い換えれば、読者の側にも自身の実践の省察を促すことになるということである。特に、ジェネラリスト・ソーシャルワークにおいては、「ソーシャルワークのアート」が重要な要素となるため、何らかの形で MHSW の想像力や感性に働きかけることが求められる。今回の事例分析を踏まえて考えたとき、「エピソード記述法」は、事例提供者はもちろんのこと、読者に対してもそのような効果をもたらさうる手法の一つになるのではないかと考察されるのである。

5-2. 今後の課題

以上これまで、ジェネラリスト・ソーシャルワークに基づく精神科ソーシャルワーク実践について、「エピソード記述法」を用いて分析を試みた。その結果、「エピソード記述法」が事例提供者の省察だけではなく、その読者に対しても効果的な手法であることを明らかにすることができた。しかし本研究では、あくまで筆者が関わった一つの事例を提示するのみに留まっており、これだけをもって精神科ソーシャルワーク実践において「エピソード記述法」が有効であると結論づけるには限界がある。そのためにも、「エピソード記述法」を用いた事例検討やスーパーバイズなどを行い、事例提供者の思考過程や省察の実際を言語化することで、事例提供者にもたらす効果を分析するなど、「エピソード記述法」の可能性をさらに検討していくとともに、そのような検証を重ねることで、引き続きジェネラリスト・ソーシャルワークに基づいた精神科ソーシャルワーク実践の実際を明らかにしていきたいと考えている。

【注】

1) 本論では、国家資格名である「精神保健福祉士」ではなく、あえて「精神科ソーシャルワーカー (MHSW)」と表記をしている。その理由として、精神科ソーシャルワーク実践は経験の積み重ねの上に行われるものであり、国家資格を取得したからと言って実践ができるわけではないことが挙げられる。特に、ジェネラリスト・ソーシャルワークは熟達したエキスパートによる実践を俟たねばならず、本研究ではこのようなソーシャルワーカーの思考過程や省察の実際を明らかにすることを目的としていることから、「精神科ソーシャルワーカー (MHSW)」の表記を用いている。

【引用・参考文献】

- Bartlett, Harriett M. (1970), *The common base of social work practice*, National Association of Social Workers. (= 1978, 小松源助訳『社会福祉実践の共通基盤』ミネルヴァ書房).
- Germain, Carel B. and Gitterman, Alex (1996), *The life model of social work practice: advances in theory and practice, 2nd ed.*, Columbia University Press, New York. (=2008, 田中禮子・小寺全世・橋本由紀子監訳『ソーシャルワーク実践と生活モデル(上)』ふくろう出版).
- Germain, Carel B. and Gitterman, Alex (2008). *The life model of social work practice: advances in theory and practice, 3rd ed.*, Columbia University Press, New York.
- 平塚良子 (2010) 「メアリー・リッチモンドによる臨床科学モデルの現代的意義」大分大学大学院福祉社会科学部研究紀要 13, 43-54.
- 平塚良子編 (2022) 『ソーシャルワークを「語り」から「見える化」する：7次元統合体モデルによる解析』ミネルヴァ書房.
- 日和恭世 (2019) 「医療ソーシャルワーカーの思考過程に関する一考察」別府大学別府大学紀要 60, 103-115.
- Johnson, Louise C. and Yanca, Stephen J. (2001), *Social work practice : a generalist approach, 7th ed.*, Allyn and Bacon, Boston. (= 2004, 山辺朗子・岩間伸之訳『ジェネラリスト・ソーシャルワーク』ミネルヴァ書房).
- 鯨岡峻 (2005) 『エピソード記述入門：実践と質的研

- 究のために』東京大学出版会.
- 鯨岡峻 (2012) 『エピソード記述を読む』東京大学出版会.
- 森口弘美 (2010) 「知的障害のある人の青年期における親子関係の変容についての一考察：親による語りのエピソード記述をとおして」同志社大学社会学会評論・社会科学 93、45-65.
- 森口弘美 (2015) 『知的障害者の「親元からの自立」を実現する実践：エピソード記述で導き出す新しい枠組み』ミネルヴァ書房.
- 中村剛 (2010) 「社会福祉施設におけるソーシャルワークの理論的枠組みと実践——ジェネラリスト・ソーシャルワークを基盤とした理論的枠組みと実践」関西福祉大学社会福祉学部研究紀要 14(1)、79-86.
- 大谷京子 (2012) 『ソーシャルワーク関係：ソーシャルワーカーと精神障害当事者』相川書房.
- 太田義弘・秋山薊二編 (1999) 『ジェネラル・ソーシャルワーク：社会福祉援助技術総論』光生館.
- Schön, Donald A. (1983), *The reflective practitioner : how professionals think in action*, Basic Books. (=2001、佐藤学・秋田喜代美訳『専門家の知恵：反省的实践家は行為しながら考える』ゆりみ出版).
- 田村綾子編 (2017) 『ソーシャルワークプロセスにおける思考過程：精神保健福祉士の実践知に学ぶソーシャルワーク 1』中央法規出版.
- 山辺朗子 (2011) 『ジェネラリスト・ソーシャルワークの基盤と展開：総合的包括的な支援の確立に向けて』ミネルヴァ書房.
- 山辺朗子 (2015) 『ジェネラリスト・ソーシャルワークにもとづく社会福祉のスーパービジョン：その理論と実践』ミネルヴァ書房.
- 安井理夫 (2009) 『実存的・科学的ソーシャルワーク：エコシステム構想にもとづく支援技術』明石書店.
- 横山登志子 (2008) 『ソーシャルワーク感覚』弘文堂.

Abstract

A Consideration on Mental Health Social Work Practice Based on Generalist Social Work: A Case Analysis through the Method of Episode Description

Keiichi HATORI, Yoshie MATSUDA

In recent years, the mainstream of social work practice is becoming generalist social work. Under such circumstances, social workers are required to practice social work with a broad perspective covering micro-meso-macro. In particular, in the practice of mental health social work, the needs of clients are diversifying, and social workers are becoming more important for accurate needs assessment and the ability to respond on a case-by-case basis. In doing so, the social worker's creativity, imagination, and practical intelligence based on intuition and experience will be important, at the same time, reflective practices of social workers will be required. Although some previous studies have clarified the practical intelligence, thought processes, and reflective practices of social workers, none of them have been examined based on actual cases. From this point of view, this research analyzed the case of social work practice in which the author was actually involved. As for the analysis method, the case was analyzed using the "episode description method". Concretely, the episode in the case was described, and the "meta-meaning" was considered as the primary analysis. As a result, I clarified the actual thought processes and reflection in practice on the case. Furthermore, I conducted repeated verifications at the study group and discussions with a co-author, and considered the generality that can be expected from the case study and the impact on readers after reading that. Through this research, I was able to clarify that the "episode description method" is effective for case analysis in mental health social work practice and reflection on the practice of social workers based on generalist social work.

Key words : Mental health social work, Generalist social work, Episode Description